日本遺産

本

遺

阳

令和元年度文化庁「日本遺産」認定 里沼(SATO-NUMA)ー「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化ー

日本遺産とは平成27(2015)年度に 文化庁が創設した制度であり、地域 の歴史的魅力や特色を通じて、我が 国の文化や伝統を語るストーリーを、 日本遺産として認定するものです。 令和 2 (2020) 年度までに全国104件 が認定されています。

《ストーリー概要》

関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と 出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里 山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺 を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれて きた「里沼(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、 沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の 原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の 恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城 とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言 い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞ れの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わ い、体感することができる。



【里沼(さとぬま)】

沼は、古代・万葉の頃には「隠沼(こもりぬ)」と詠われ、 水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人 を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼 に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生 業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。里沼は、自然 と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴 重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地 から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねなが ら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見るこ とができる。





「実りの沼」~"麦都"館林を支えた多々良沼~

❖多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「た たら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、 500年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の 歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支 える生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。



❖沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二 毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ 小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。 明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興 り、"麦都"となった館林では、麦を原料とした麦落雁 やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と 大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ 現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。

❖「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、 **鯰の天ぷらや鯉の洗い、鮒の甘露煮など沼の幸を活か** した個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた 様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付い ている。

日本遺産「里沼」構成文化財(多々良沼周辺)

5 **多**夕良沼

館林市の西北部にある 問囲約7kmの沼で、≤ 安時代に行われた蹈鞴 製鉄から名付けられた



という。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から 用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の 二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。こ の「実りの沼」からとれる鯉や鮒、鯰や鰻などは、里 人の貴重なたんぱく源となった。

たたらぬまいせき **6 多々良沼遺跡**(カナクソ)

多々良沼北岸にある 遺跡で製鉄生産址と 伝わる。現在の日向 漁港の沼辺では、冬



に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製 鉄の時に出された鉱滓を見つけることができる。

[※多々良沼野鳥観察棟で展示

プ 内陸古砂丘

未指定(地質鉱物)

利根川が形成した自然 堤防の砂層で、館林市 南西部から多々良沼東

岸まで続く。砂鉄を豊

富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や 薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町 遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。

8 大谷休泊の墓

中世の開拓者大谷休治 の墓。休泊は戦国時代



み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼な らの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した 多々良沼周辺の松林は休泊の植林事業によるもので

り 上三林のささら

館林市指定重要無形民俗(芸能)

館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。多々良 沼からの用水によって、二毛作が盛んとなった地域 で、江戸時代中期から五穀豊穣と厄病神追払の祭事

巡行する。



10 封内経界図誌

群馬県指定重要文化財(歴史資料)

主秋元志朝によって作成さ れた領内52か村の彩色村 絵図。村ごとに十地利用が 色分けされ、江戸時代の沼



の形が一目でわかる。河川や田畑、集落の範囲も指 かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることがで [※館林市第一資料館で展示



がまっきょく ひなたぶね 沼の漁具と日向舟

館林市内の沼では、広く 網を仕掛けて、舟に乗っ て集団で行う追い込み漁 のほか、ハズ漁・ヤス漁 な漁具が生まれた。沼に よって使用する舟も形が



りを保護するために一枚板を取り付けており、「日向 舟」と呼ばれている。 [※館林市第一資料館で展示

かわざかなりょうり なまず こい ふな うなぎりょうり 川魚料理(鯰・鯉・鮒・鰻料理)

未指定(民俗)

沼が点在する館林地域 では、昔から鯰・鯉・ 鮒・鰻などの川魚料理 が食されてきた。館林



ことがある。中でも鯰が有名で、天ぷらや小麦粉を あえて揚げたタタキアゲは、この地域の代表する料 理となっている。 [※市内の川魚料理店でご賞味ください]



③ 正田醤油(株)旧店舗・主屋 [正田記念館]

国登録有形(建造物)

城下町で江戸時代から 商家を営む正田家は、 「実りの沼」によって育 まれた館林特産の小麦 明治6年(1873)に醤油



醸造を開始した。正田記念館は嘉永6年(1853)建 築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関す る資料が展示されている。

そうぎょう き にっしんせいみんたてばやしこうじょう じ む しょ 創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館]

未指定(建造物)

明治43年(1910)に日清 製粉株式会社館林工場 れた木造2階建ての浄 風建造物。「実りの沼



本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業110周年を 記念して製粉ミュージアム本館として公開された。

未指定(民俗)

③ 館林のうどん

江戸時代に「饂飩粉」(小麦 粉)は館林藩の特産として 将軍家へ献上されていた。 「里沼」と利根川・渡良瀬川



がもたらす豊富な水資源が 地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるか らっ風による乾燥した気候からうどんの産地となっ た。"麦都"館林のもてなし文化に欠かせない名産品

である。

未指定(民俗)

大麦粉を利用して作られ た麦落雁は、館林を代え する銘菓で、文政年間 (1818~30)に完成して



[※市内のうどん店でご賞味ください]

以来、館林城主献上の栄を賜ったという。城下町に 根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつ じが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺の もてなし文化を彩るものとなった。

[※市内の土産物店でご購入できます]

8々良沼野鳥観察棟 日本遺産「里沼」展示 コーナー

日本遺産 日本遺産「里沼」を歩く②

―「実りの沼」・多々良沼散歩-

※本パンフレット記載内容の無断転載を禁止します。 SATO-NUMA.JP

⑩は、日本遺産「里沼」構成文化財の番号です。

